

2017年12月、ノルウェーの首都オスロの市庁舎に、世界中から大勢の人が詰めかけました。

ノーベル平和賞の授賞式が始まるのです。

受賞者はICAN。正式な名前を「核兵器廃絶国際キャンペーン」と言い、地球上から核兵器をなくすために、国際的に活動しているグループです。

ファンファーレが鳴り響き、参列者はいっせいに立ち上がりました。後ろのとびらが開いて5、6人の一団が現れ、大きな拍手の中、舞台に向かって歩いていきます。

前に行くのはICANの若いメンバーたち。そしてすぐうしろに、車いすに乗った女性の姿がありました。ICANの先頭に立って核兵器の廃絶を訴えてきた、85歳になるサーロー節子さんです。

ICANの代表者ベアトリス・フィンさんのスピーチが終わり、参列者の目はサーロー節子さんに注がれました。

サーロー節子さんはつえを手にして立ち上がり、ゆっくりと演台に歩み寄りました。そして静かに、しかし一言一言きざみつけるように話し始めました。

同情してほしいのではありません。そんなことはこれっぽっちも望んでいません。

わたしたちは、核兵器によって世界がよごされていくことを、いや、もしかしたら一瞬で地球が木っ端みじんになってしまうことを、ただじっと待っているのはまっぴらなのです。だから声を上げたのです。

大国と呼ばれる国々にが世界の人びとを核兵器で焼き尽くそうとしているのに、びくびくしながらだまってうつむいているしかないのでしょうか？

いえ、わたしたちは立ち上がりました。原爆をあびて生き抜いてきた人生を、人びとに語りました。そして声に出して言ったのです。「人類は核兵器を持ってはならないのだ」と。



今夜、燃え立つたいまつをかかげて、ここオスロの町を行進しましょう。
核兵器がもたらす恐怖の暗闇からぬけ出すために。

わたしたちには情熱があります。どんな障害があろうと、前に進もうとする情熱です。

そしてみなさんとともに誓います。

何があろうと進み続け、光を分かち合っていくことを。

